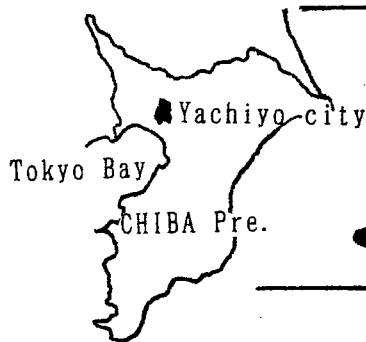




まい 埋やち

No.19

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2009. 4. 20
(平成 21 年)

浅間内 (あさまうち) 遺跡特集 (3)

No.14・No.16 に続き、浅間内遺跡を特集します。

【古墳時代の浅間内遺跡】

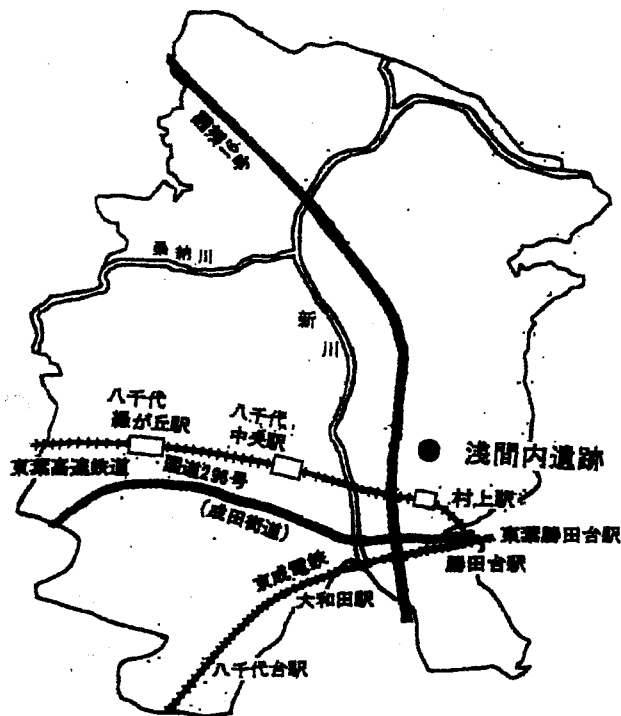
今回は、古墳時代をとりあげます。古墳、すなわち大きな墓は、権威の象徴です。権力の強い支配者層が出現した時代です。

古墳時代前期 古墳時代の始まりは、今から1600年前頃です。浅間内遺跡にも古墳(浅間内古墳)が造られます。弥生時代後期の方形周溝墓2基とともに、台地先端部の崖際に半壊の状態で見出されました。遺物は、表面に刷毛目の調整があり、胴部が球形の甕(かめ)が1個体分だけ出ているだけです。南西部の状況がわかりづらかったのですが、M21と名付けた溝跡まで古墳の範囲だとすると、全長33.5m規模の前方後方墳(ぜんぽうこうほうふん)ということになります。村上地区のみならず、新川を挟んだ対岸の萱田地区をも含めた地域を支配した人物のお墓かもしれません。

他に、この時期と考えられる竪穴住居跡があります。赤く塗られた壺(つぼ)、高坏(たかつき)、埴(かん)という小型丸底壺など祭祀(さいし)に使われたと考えられる土器が多く出土しました。

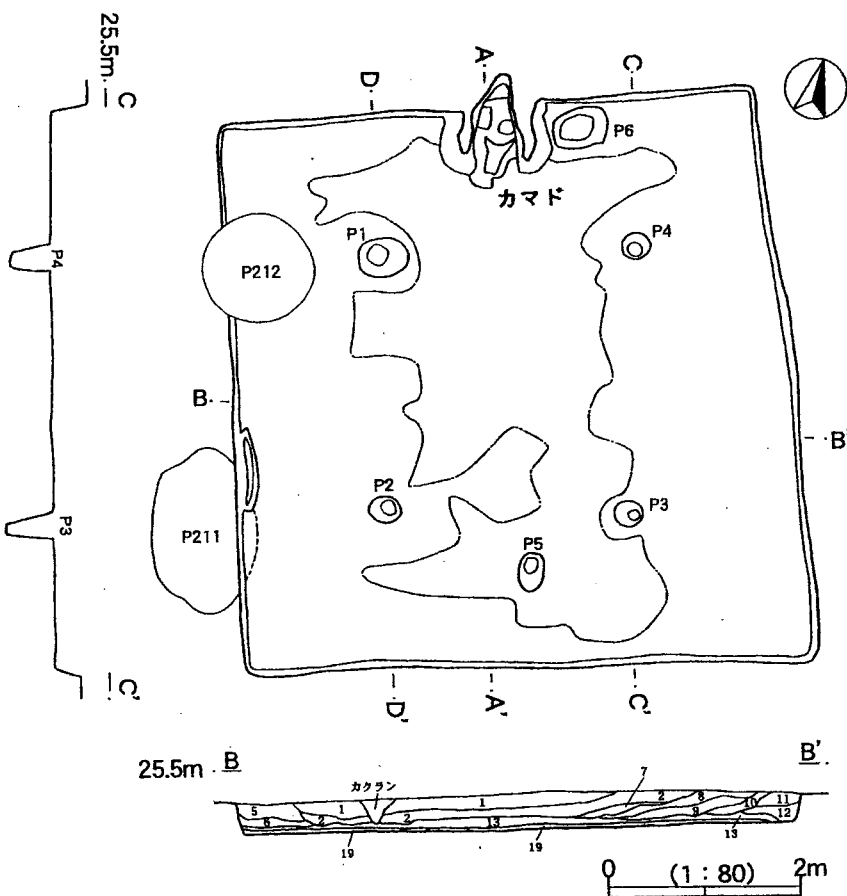
古墳時代中期 中期の遺構は、竪穴住居跡があります。この時期は「石の文化の時代」とも呼べる一面を持っています。萱田地区に石製模造品(せきせいもぞうひん)という、鏡・剣・玉などをかたどった石製品を作る工房(こうぼう)跡が出現し、神野芝山古墳群の4号墳に石枕(いしまくら=市指定文化財)が副葬されたのはこの時期です。浅間内遺跡でも剣形石製品や臼玉(うすだま)などが出土しています。

古墳時代後期 後期の遺構は、やはり竪穴住居跡です。中期～後期には、住居の燃烧施設が

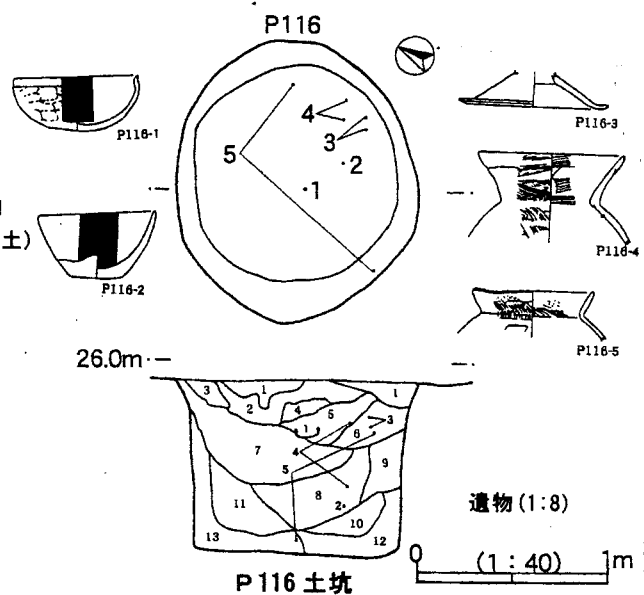
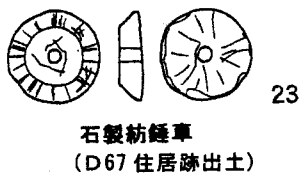
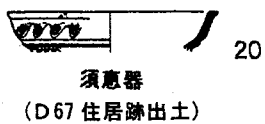
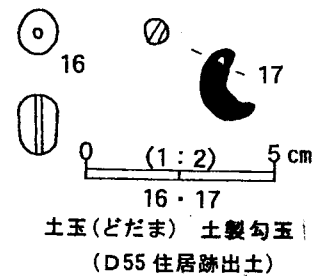
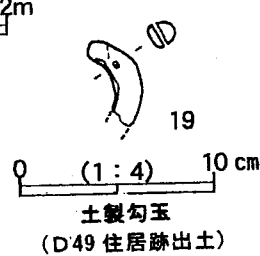
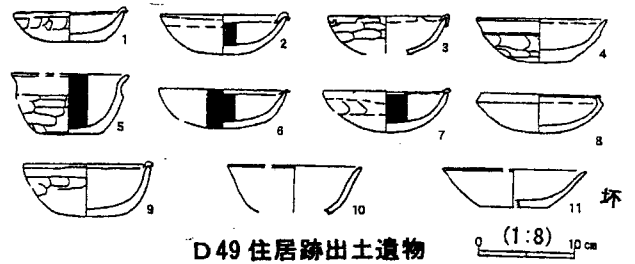
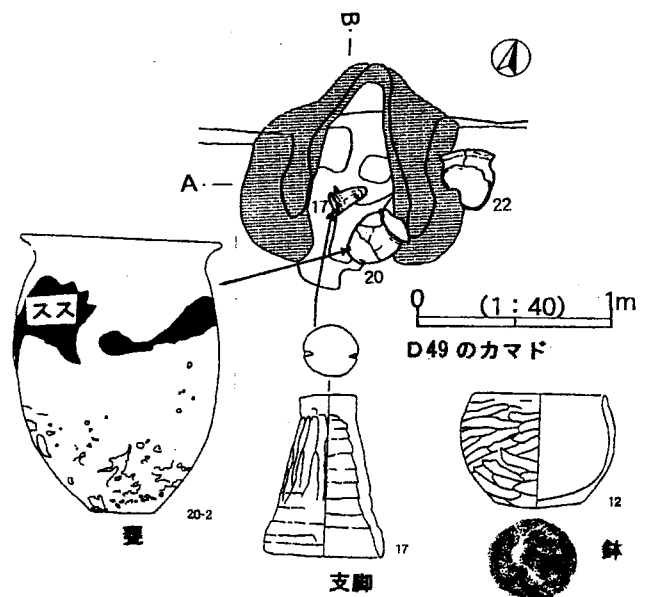


炉(ろ=床面に掘られた窪みで火を焚く)からカマド(壁に作りつけた粘土製のドームの中で火を焚く)へと変化します。これに合わせて、カマド内で使う支脚(しきゃく)や長胴(ちょうどう)の甕が出現します。他に坏や鉢、甑(こしき)、石製紡錘車(ぼうすいしゃ=糸をつむぐための重り)などが出土します。また、窯(かま)を造って焼く須恵器(すえき)という灰色の硬い土器や鉄製品も見られるようになり、新しい技術が生活に浸透してきた様子がわかります。石製品は減少し、それに代わるかのように粘土を焼いて作った玉類が出土します。

浅間内遺跡には後期古墳はありませんが、南東約200mに市内最大の前方後円墳である根上神社(ねのかみじんじゃ)古墳(市指定文化財)があり、さらにその南東300mには古墳を含む村上第1塚群がありました。これらの中に浅間内集落の支配者が埋葬されているのかもしれませんが。



D49 住居跡 実測図



—編集後記—
奈良時代以降の詳しい報告は、また
次回以降に特集したいと思います。

埋 (まい) やちよ No.19

—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—

平成 21 年 4 月 20 日

編集・発行 八千代市教育委員会

教育総務課 文化財班

八千代市大和田 138-2

☎276-0045 ☎047(481)0304